

牧師室から (2022.2.20)

NHKのラジオ番組に「宗教の時間」というのがある。そこに12月26日(前編)と1月6日(後編)に放送されたもので、「苦難の意味—『ヨブ記』を読み解く」というテーマで、並木浩一先生の話があった。2月20日午前9時まで「聴き逃し配信」で聴くことができるので、まだの方はインターネットを通して聴いてみることを勧めたい。

並木浩一先生は「ヨブ記」研究において、日本を代表する旧約学者である。先生の学問の深さと洞察力、また霊性について、いつも感服している。先生の著書を通していろいろ考えさせられることが多いが、そのうち一つのことを紹介したい。

ヨブ記1章4, 5節に、息子たちは順番に自分の家で宴会を開いた。それが一巡りする度に、ヨブは息子たちを聖別し、神様にいけにえをささげるようにしていた。なぜならば「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思っていたからであった。その「心の中で神を呪っていたかもしれない」というところを、並木先生は「心の中で神を讃えたかもしれない」と訳している。原文での、讃える、祝福すると訳されるところを捉え、呪うという正反対の意味も含んでいる両義的言葉として解釈している。

つまり、ヨブが住んでいた当時はとても厳しい社会状況であって、貧しい民衆に囲まれている中で、息子たちの感謝が民衆の貧しさへの無視と無感覚になるならば、それは神を呪うに等しいことという。ヨブは息子たちの神様への感謝と讃美がそのようなものになることを恐れていたのである。

このヨブの話は、今を生きる私たちにも向けられたような、怖いほどの警鐘であるのに違いない。

(鈴木善姫牧師)